



# みつぎ便り



第157号 10月号 令和元年10月1日発行 [http://itbs-ecopo.jp/environsurvey\\_report](http://itbs-ecopo.jp/environsurvey_report)

板橋区役所みどりと公園課の花作りグループとエコポリスセンターのかんきょう観察員地域自主活動グループに所属しているボランティア団体「見次の会」です

## トンボ

見次公園ではシオカラトンボを始め  
ギンヤンマ、ノシメトンボなど五、六  
種類のトンボが観察されています。

シオカラトンボは中型のトンボで雌  
雄で大きさはかわらないが、老熟した  
ものでは雄と雌とで体色が異なってい  
ます。雄は老熟するにつれて体全体が  
黒色となり、胸部から腹部前方が灰白  
色の粉で覆われるようになってツイ  
ンカラーの色彩になっています。この  
粉を塩に見立てたのが名前の由来のよ  
うです。雌や未成熟の雄では黄色に小



さな黒い班紋があるのでムギワラトン  
ボ(麦藁蜻蛉)とも呼ばれます。

トンボと言えば、夏から秋を代表す  
る昆虫で子供の頃の遊び相手でした。  
止まっているトンボの目の前に立ち、  
人差し指を回して手で捕らえた記憶が  
懐かしいです。  
(重)

## ヒガンバナ

北側の水路近くにヒガンバナが開花  
しています。九月中旬頃になると、先  
端につぼみのついた茎がのびだし、そ  
のあとに花が顔を出します。秋の彼岸  
の頃に開花し風景を赤く染める様子は  
秋の風物詩です。

ヒガンバナは、花の時期には葉が見  
られず、花が終わってから細長い緑色  
の葉がのび、翌年の春には枯れる。こ  
うして他の葉が少ない冬に日光を独占  
して光合成を行い、地下の球根に栄養を  
蓄えています。他の花と違い、葉と花  
が別々の時期に展開することから、ハ

ミズハナミズとも呼ばれる様です。

別名の曼殊沙華(マンジュシャゲ)は  
梵語(古代インドの文語であるサンス  
クリット語)では、天上に咲くという  
花の名です。

ヒガンバナは稲作とともに日本に、  
もたらされたものと言われています。  
茎の毒性が田や畑、墓地を荒らす動  
物や虫を寄せ付けないように人為的  
に植え付けられたものですが、今で  
はヒガンバナは日本の原風景となっ  
ています。  
(薫)

